

6. 下奈良天満宮

下奈良天満宮は、八幡市奥垣内に所在する。下奈良村の旧村域のほぼ中央に位置し、西に 200 m の地点には浄土宗正光寺が所在する。『村誌』によると、下奈良村は明治期の大合併以前までは山城国綴喜郡下奈良村に属するが、慶安 4 年（1651）までは旧久世郡奈良郷に属しており上下分村した。村全体は慶長 5 年（1600）より石清水八幡宮の神領となっている。村の北東部が木津川に面しており、水陸運送にたいへん至便な土地である。天満宮は村社であり、創立時期の詳細は不明であるが、菅原道真を祭神として祀る。

境内に現存する石造物は、燈籠が 3 対 6 基、狛犬が 1 対 2 体、手水鉢が 1 基、鳥居が 1 基である。この中で最も年代が遡る石造物は、享保元年（1716）の鳥居で、次いで拝殿の左右に配される円柱形の燈籠 1 対（1・2）が享保 2 年（1717）のものであり、少なくとも 18 世紀初頭までには天満宮が創建されていたことになる。その他の燈籠のなかで、方柱形の 1 対（3・4）は享和年間で、参道入口に現存する撥形の 1 対（5・6）は天保年間のものである。また本殿には、使用された近世の陶器皿が収蔵されており、木枠に並べて祭の際に用いられたとのことである。

（笹栗拓）

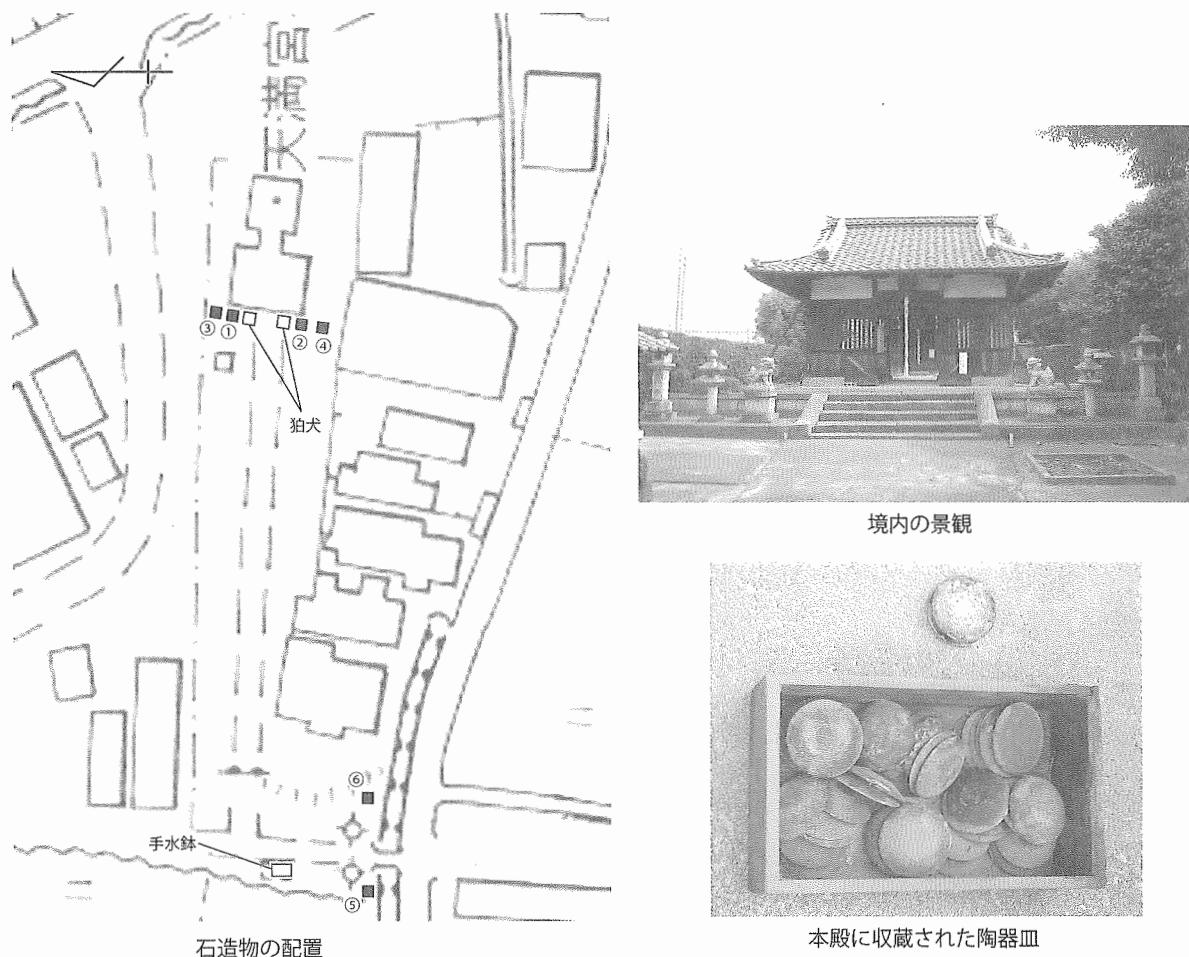


図 17 下奈良天満宮（1）

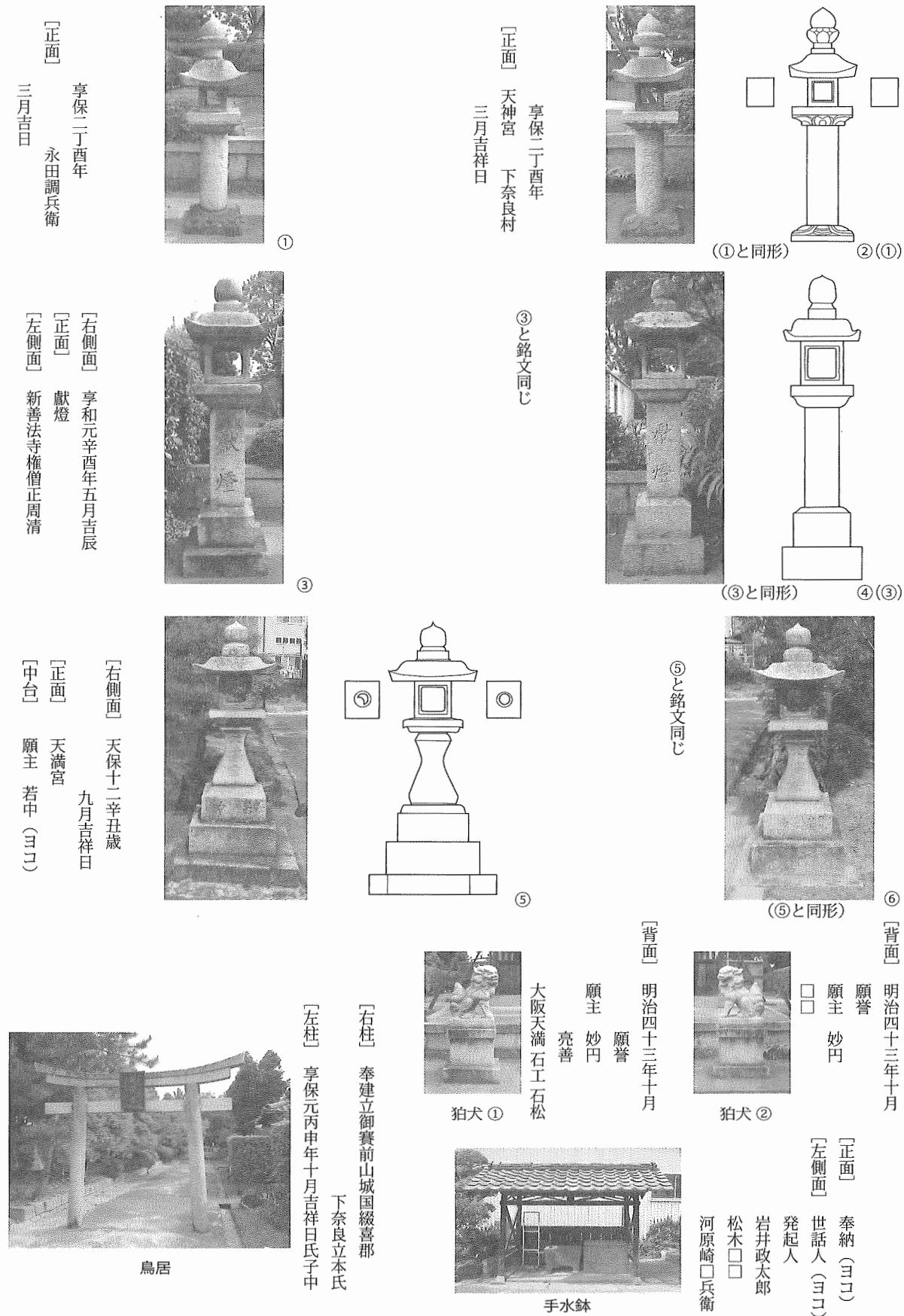


図 18 下奈良天満宮 (2)